
ポニーテールとシュシュ

嘘つき桃頭巾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポニーテールとシュシュ

【Nコード】

N5347P

【作者名】

嘘つき桃頭巾

【あらすじ】

友情と偽って、実は恋心を隠し続けてきた『自分』。結局、傷ついちゃうのは『自分』なんだね。
ずっと、君の為にポニーテールに結っていたのに――。

（前書き）

これ、実話をもとにした作品です （自分の）

ほぼ、本当の話w w だから、話を考えなくて良かったので超楽
だったw

だらだら長いですが、その辺は許してー

…男女の友情。その中で、友情と偽り淡い恋心を抱く――。結局、それで一番傷ついてしまうのは誰なんだろうか。……それはね。

『私』だったんだ――……。

「ねー！夏休み、映画行かない？」

「いいね！何観に行くー？」

「あたしは何でも良いよー。」

「……へえー映画、良いねー。それ、俺達も行って良いだろ？」

「うわっ…来たあww でも、良いよね？ユリ？」

「いつメンだし、良いっしょー！」

「……イエーイ！！」

ウチら、女子三人、男子三人の、仲良し六人組です！！

女子のメンバーは、しっかり者で食品会社の令嬢、『ユリ』こと丸岡ゆり。天然だけど憎めない『ミサキ』こと河野美咲。そしてウチ、神田奈緒。

男子のメンバーは、イケメンでドS、御曹司の『シンゴ』こと寺原信吾。面白くて明るい『トシ』こと岩切俊明。スポーツ万能の『ジヨウ』こと相馬丈。いつもこのメンバーで遊んでいます

ツンツン

「ん？何、ミサキ。」

「ジヨウも来てくれるって。良かったねえ、ナオ。」

「本当。あたしも好きな人と映画行ってみたいな。」

「………。茶化さないでよお。」

「「満更でも無いくせに」。」

「？。。。」

そう、ウチはこのいつメンの中に、好きな人がいる。お相手は、相馬丈。一年前からずっとずっと思っている。男子メンバーには言っていないけれど、何となく、気づいているらしい。気を利かせて、二人きりにさせたりしてくれている。

「ああ、ほらほら、愛しの彼が来たよお。さあ、行ってこいっつ！」

「ちょ、ミサキ……。ギャツッ！」

全く…すぐからかうんだから。ジヨウにバレたらどうしてくれるの。文句を言おうと思ったら、目の前にジヨウの姿があった。

「っ…ジヨ、ジヨウ！…!?」

「なにビビってんだよ。早く朝の掃除行こーぜ。」

うちの学校は、朝も昼も掃除をする。そこまで掃除しなくても…とは思うが、この時間は ジヨウに一番接近する事ができる時間。すごく貴重だ。

「そーだねツツ！早くしないと怖い先生に怒られちゃうよ！…」

とりあえず誤摩化すようにして中庭の掃除に出かける。それに皆賛同する。…何とノリの良いグループなんだろう。

「そーいえばさあ、何観に行く？映画。」

掃除をしている途中、ユリが皆に聞いた。こういう時の仕切り係は、ユリかシンゴが主流だ。

「何だっけ…。『ホッタ ケの島』なら、割引券あるけど。どーせなら、安く済ませた方が良いんじゃないかね？」

金持ちなのに一般庶民と同じような意見を言うシンゴ。

「あー俺、今月小遣いピンチなんだよお。割引券あるのは、有り難い！…」

「確かに!!」

ジョウとトシ。

「丁度、ミイ観たかったんだよ」『ホッタ ケの島』。」

ミサキも言った。となると…次はウチの番。

「え〜っと…じゃあ、『ホッタ ケの島』観に行くって事で良いかなー!？」

「……いいともー!!!」

ウチらは、夏休みに『ホッタ ケの島』を観る事に決定した。

——夏休み某日

「イエーイ!!! ついに来たねー、映画!!!」

ウチが言うと、ウチの背中できっちり束ねたポニーテールの毛束が揺れた。すると口々に「早く観てーな」「プリも撮りたい!」「昼飯どこで食う?」など、思い思いに呟き始めた。

「じゃあ、とりあえず券買お。朝イチの観るんだから。それに、席が前の方とか嫌でしょ?」

ウチの提案で、まず券を買い、席につく事にした。皆が気遣ってくれたのか、ウチの右隣がジョウだった。左隣のユリに小声で聞く。

「ユリッ…。絶対仕組んだでしょ……。」

「あれ？相馬丈君が好きって言ったのはどのどいつだっけ？？」

「（ムカツ…）だとしても、二時間以上隣にいるって思うと、心臓が保たないから！！」

「左隣にはあたしがいるじゃない。」

「うゝゝ…。」

でも、折角隣にさせてくれたんだから、有り難く思つか…。

そして、上映が始まった。右隣が気になって気になって、集中できない。映画も中盤に差し掛かった時、ジヨウが呟いた。

「あ。ポップコーン無くなった」

…まだ話も半分しかいってないのに。呆れながら、前のスクリーンに視線を戻す。すると、右隣から突かれた。

「…なあに？ジヨウ。」

「ポップコーンまだ残ってるだろ？くれよ。」

「…やだ」

「ケチ臭えなあ。頼むよ」

来た。ジヨウお得意のおねだり攻撃。ウチは仕方無く「分かった」と言った。

「口放り込んで。暗くてよく見えないし」

「はぁ！？」

「は・や・く！」

それって、それって、『アーン』するって事じゃない！！

「も、もお！分かったから！口開けて！」

「オッケー」

口にポップコーンを放り込んであげる。幸せそうに食べるジヨウ。やばい。やばいやばいやばい！だってこんなのカレカノみたいじゃん！！

そして映画も終わり、やりたい事は全てやったので、帰る事になった。ウチは、自転車で帰っている途中、皆に提案した。

「ね、ねえ！明日皆で海行こうよ！！思い出って事で」

「へえ〜。良いね、海！」「確かに行きたい！！」「良いアイディアじゃん！！」「ノリが良すぎるんじゃないか？このいつメン達。」

「じゃ、ナオの提案で、海行こう！！」

ユリがまとめた。皆、勿論賛成。

翌日

ウチは、気合いが入っていた。長めの髪を、櫛を器用に使って束ね、シュシュを付ける。普段毎日やっている事だが、いつもの何倍もの時間をかけて。今日は自分の中で賭けをするんだから。

約束の時間、皆が集合し、海へと向かった。自転車をひたすらこぐ。だが、喋りながらなのであつという間に到着した。

「わーっ！超キレー！！」

海が太陽の日差しを受けて、揺れながらきらめいていた。幻想的こんな綺麗な景色がジヨウの隣で見れるなんて。ジヨウも珍しく、「綺麗だな…」と感動していた。

海の家で昼食を食べ、海で泳いだり、ビーチバレーをしたり、鬼ごっこをしたりしているうち、すぐに夕日が顔を出した。昼時に見た透き通る青色とは違い、明るい橙色になっていた。

「ナオ〜ジヨウ〜。あたし達、ちよつとジュース買ってくるよ。二人はここで待ってて！！」

ユリが言った。え？まさか！！

「ユ、ユリ！何言って——」

「こんな綺麗な景色を二人だけで見て、思い出にすればいいでしょ？それじゃ、ジュース買ってくるから」

そう言って、さっさと行ってしまった。残るはウチとジヨウ、二人のみ。

「あ、ナオ、ポニーテールほどけてるじゃん。」

「え、え？マジ？」

髪に触れてみると、確かに、ほどけていた。

「本当だー…。直さなきゃ。」

ウチは慣れた手つきで乱れた髪を直していく。

「やっぱナオはポニーテールが似合うよなあ。」

「いつも言ってるよね、それ。」

そう。ウチがいつも髪をポニーテールに結うのは、ジヨウが「似合ってる」って言うってくれるから。だから、毎日毎日この髪型。

「あ…あれ…もしかして…」

ジヨウが言った。視線の先には、同じクラスの莉子ちゃんがいた。莉子ちゃんというのは、可愛くて、運動神経のいい、とても良い子だ。

「あー莉子ちゃんだ。声掛けよー…」

「やめろ」

「え？」

「べ、別に…声掛ける必要無いだろ。」

そういうジヨウの頬は、紅潮していた。ウチは、この時——気づいてしまった。

ジヨウは、莉子ちゃんの事が好きなんだって——。

そこに、ジュース片手にユリ達に戻ってきた。

「はい、ジュースね〜！コレ飲んだら、そろそろ帰りましょう〜」

「ありがとう。」

「サンキュ」

ウチは、早く帰りたいが為にジュースを一気飲みした。ジヨウも、多分莉子ちゃんに気づかれたくないからなのか、ウチより早く飲み終わっていた。

帰る時、ウチとジヨウは一言も喋らなかった。

家に戻った。直ぐさま、自分の部屋に駆け込む。そして、泣いた。涙が枯れるほど泣く、という表現は当てはまらなかった。むしろ、枯れて欲しいと思う程泣いた。静かに、静かに。

そして、居間に行った。気を紛らわすため。何気なくテレビをつけると、歌番組がやっていた。

『次は、AKB48でポニーテールとシュシュです！どうぞ！』

ポニーテールと…シュシュ……。ウチは、指を髪の毛に触れさせた。ウチも…ポニーテールだ……。

もう歌が始まっていた。ウチは、テレビに近付いた。

ああ…この歌詞、ウチと何処か似ているなあ……。もう一度、ウチの頬を涙が伝った。

「っ……ジョウッ……！」

大好きだったよ。ウチは精一杯恋したよ。これで——良かったんだ。新しい恋を…探せば良い。ジョウを困らせないた為にも。

後日。ウチは、髪を切った。ポニーテールには結えない長さに。

君は——あの子と、幸せに笑っててよ。ウチも、頑張るからさ——。

（後書き）

長かった…かな？
感想等、いつでも受付中です♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5347p/>

ポニーテールとシュシュ

2011年1月7日23時34分発行